

# 男子新体操競技の普及と発展について

香川県立坂出工業高等学校

林 晋 平

## 1.はじめに

### (1)坂出工業高等学校について

本校は機械科、電気科、建築科、化学工学科の4つの学科を持つ生徒数418名の工業高校である。本州と四国を結ぶ瀬戸大橋にほど近い坂出市郊外に位置し、今年度創立80周年を迎えた。以前は4科に加え、県下の工業高校で唯一、自動車科を有していたが生徒数の減少に伴い、平成15年度末に閉科した。しかしその後、機械科に2年次からコース選択制を取り入れ、自動車コースとして残すなど、卒業後の進路を見据え、専門的知識・技能の習得に努めている。また、3年次には就職だけでなく、大学進学を希望する生徒を主体とした進学コースを設けるなど、夢や目標を持って学習に取り組む体制を整えると共に、伝統を大切にしながら社会に貢献できる人材育成に取り組んでいる。

現在、生徒の約6割が就職、約4割が進学している。就職内定率は100%を推移し、本年度の生徒一人当たりの求人倍率は10倍を超えており、企業との信頼関係が厚くなっていることがうかがえる。また、国公立大学や有名私立大学への進学実績も徐々に上がってきている。

部活動は運動部11部、文化部が6部あり、活発に活動している。その中でも体操部、カヌー部は毎年インターハイ等の全国大会に出場し好成績を収めているほか、これまでにバレーボール部がインターハイ3位入賞、バドミントン部が今年度創部初のインターハイ出場を果たしている。また、ものづくり技術部が、化学技術分野において希少糖甲子園大会に出場、ダイオキシン類関係公害防止管理者試験にて合格者数日本一の成績を収めている。機械技術分野においても全国高等学校ロボット競技大会やロボットアメリカンフットボール大会に出場するなど各分野で活躍している。

### (2)新体操の歴史

日本では、昭和21年に第1回国民体育大会が戦火を免れた京阪地区で開催され、「団体徒手体操」が京都においてデモンストレーション形式で行われた。その翌年、第2回国民体育大会が石川県で開催され、初めて「団体徒手体操」の名称で実施された。昭和42年に「新体操」と改称し、競技内容も従来の団体徒手体操の他に、個人種目を取り入れられた。その後、その名称のもと昭和43年に茨城県水戸市で全日本選手権大会、長崎県でインターハイが開催され、男子が団体徒手体操の規定と自由、個人種目はタンブリング、女子は団体手具体操の自由、個人種目は手具体操で競技が行われた。国体においては昭和47年鹿児島国体から「新体操」の名称を使用するようになった。昭和48年全日本選手権大会から男女とも団体競技(団体体操)と個人競技(4種目)となり、団体体操、個人総合、種目別の3選手権を競う大会となった。

現在の新体操は、国際的には女子のみであるが、わが国では当初から男女とも実施している。これは学校の体育が体操中心であったため競技への土壌ができていたことや、体操は男女の別なく基本的なものだという考えに基づくものである。これはわが国独自のものとして誇るべきであろう。

本校の体操部においては、今年度創部67年目を迎えた。

### (3)男子新体操の競技内容と現状

男子新体操競技(以下「新体操」と略す)は団体競技(以下「団体」と略す)と個人競技(以下「個人」と略す)からなり、体操競技のゆか種目と同じ13m四方のマットを使用し、伴奏音楽を付けて演技を行う。団体は1チーム6名が2分45秒から3分の制限時間内で規定演技を加味した徒手とタンブリング(跳躍・転回運動)等を交え、ダイナミックさや同時性の美しさを競う。個人はスティック、クラブ、リング、ロープの4種目の手具を操作しながら各1分15秒から1分30秒の間で演技を行い、手具さばきの一体感と個性的な表現を競う。団体、個人ともに構成(作品内容)と実施(演技の出来映え)で評価される採点競技である。

競技性、活動についてはあまり知られておらず、実際に演技を観たこと経験したことがある人の数も限ら

れている。平成 28 年度全国高等学校体育連盟加盟・登録状況で最も多かったサッカー競技 169,855 名に比べ、新体操は 514 名。右記の表 1、2 にもあるように、新体操の登録競技人口は平成 29 年度現在で、幼児から社会人までを合わせても 1,848 人、登録高校数も 65 校と非常に少ない。このような現状の背景には、専門的な知識と技術を持った指導者の少なさ、限られた競技施設、そして、競技自体の認知度の低さがあると考えられる。

また、国体については、平成 20 年度の大分国体を最後に実施種目から外され休止状態となっている。

一方、体操競技の認知度は高くスター選手も存在し、男子はリオデジャネイロ五輪でアテネ五輪以来 3 大会ぶり 7 度目の金メダルを獲得した。女子新体操競技においては昨年イタリアで行われた世界選手権において団体総合で 42 年ぶりにメダル獲得を果たしている。新体操は上記のような世界規模の大会がないために休止になったと記憶している。今後、国体での競技復活のためにも普及と発展が急務である。

表 1. 平成 29 年度 男子新体操競技人口調査表(人)

No	ブロック	幼児	小学生	中学生	高校生	大学生	社会人	計
1	北海道	54	147	26	31	1	22	281
2	東北	10	77	78	96	54	11	326
3	関東	6	109	44	60	35	7	261
4	北信越	1	47	25	33	0	0	106
5	東海	5	47	46	105	3	3	209
6	近畿	1	50	46	73	33	3	206
7	中国	2	31	16	24	0	0	73
8	四国	0	22	12	26	0	6	66
9	九州	7	117	64	114	13	5	320
	合計	86	647	357	562	139	57	1848

※男子新体操委員会調査

表 2. 平成 29 年度 男子新体操登録高校数調査表(校)

ブロック	県名(登録高校数)	計
北海道	北海道(4)	4
東北	青森(3) 岩手(1) 宮城(3) 秋田(0) 山形(3) 福島(2)	12
関東	茨城(0) 栃木(0) 群馬(3) 埼玉(2) 千葉(1) 東京(1) 神奈川(1) 山梨(1)	9
北信越	新潟(0) 長野(1) 富山(1) 石川(2) 福井(1)	5
東海	静岡(2) 愛知(3) 三重(1) 岐阜(1)	7
近畿	京都(4) 大阪(3) 兵庫(4) 滋賀(0) 奈良(0) 和歌山(0)	11
中国	鳥取(1) 島根(0) 岡山(1) 広島(2) 山口(0)	4
四国	香川(1) 徳島(1) 愛媛(0) 高知(0)	2
九州	福岡(3) 佐賀(1) 長崎(0) 熊本(2) 大分(1) 宮崎(1) 鹿児島(2) 沖縄(1)	11

※全国高体連体操専門部技術部会調査

## 2.研究の目的

新体操の認知度は低く、中学、高校、大学の部活動数も限られており、メジャースポーツのように卒業後に活動できる企業所属チームもなく先行きも不透明である。また、競技の発展はおろか、存続すら危ぶまれている。このような状況の中、各地でパフォーマンス集団としての活動場所の確保やメディア放映、定期的な競技公演などの企画、ジュニアクラブの設立などを通して活動人口の増加を図っているが飛躍的な改善をみていない。そこで、競技の存続と活性化を図るために部活動としての存在意義を構築し、1 学校の部活動レベルで取り組むことのできる活動を模索する。

## 3.研究の方法

### (1)ジュニアクラブの再建

スポーツ活動は幼少期の習いごとの一翼を担っている。スポーツ系の習いごとの上位「水泳」に続いて「体操」、「サッカー」が入っており、近年の人気の高さがうかがえる。しかし、学年が上がるにつれ「体操」はランキングから姿を消し、新体操に限っていうとその数は中学で約半分になっている。(表 1.3.参照)その原因を探り、改善するため、赴任当初から活動していたジュニアクラブの体制見直しを図ることとした。

まず、受け入れ対象を男女だったものを男子のみに、また、小学生だけだったものを中学生までとした。

次に、活動内容を体操(トランポリン・マット運動)から新体操に特化したものに変更して平成23年10月に「坂出ジュニア新体操クラブ」を再建した。また、活動場所の拠点を本校体育館に置き、指導者には本校体操部のOBを充て、毎週土曜日に2時間指導を行うこととした。

### (2)演技会開催の取り組み

香川県内において新体操の演技を間近で見ることができるのは、校内練習、県総体と県新人大会の

み、観覧者も保護者やOB等、本校体操部の関係者に限られている。新体操はフィギュアスケートやシンクロナイズドスイミングのように美しい身体の動きを表現するスポーツである。伴奏音楽とマッチしたリズムカルな動きで、美しく躍動感もあり、観ている人を楽しませ、感動を与えることができる。その特性を活かして、年に1回、国体の開催時期に併せて演技会を開催することで、一般の方への観覧機会を設け、新体操の深化を図ることとした。

当初は本校体操部員とOB、指導者が中心となって演技を披露し、来場者も保護者やその友人数名程度と小規模なものだった。規模の拡充を図るために様々な工夫を行う必要があった。

まず、新体操の魅力を十分に伝えるため、全日本新体操選手権大会で優勝した経歴をもつ大学生や社会人選手といった全国トップレベルの選手を招待した。その他、現在活躍している本校卒業生の大学生や社会人選手、ジュニアクラブや県内の高校の女子新体操部の演技も併せて披露した。

次に、トランポリンや競技で使用するフロアーを使用してマット運動を行うなど、来場者が新体操を体感できる機会を設けた。

また、学校周辺のコンビニエンスストアや商店にポスター掲示を依頼し、テレビ番組やラジオ放送を利用するなど様々な方法で広報活動を行い、一般の方々へアプローチした。学校関係には、坂出市内の小学校や県下の中学校、近隣の高等学校及び特別支援学校にクラス数分のチラシを配布し、教室掲示を依頼するなど積極的に周知活動を行った。

### (3)活動の充実を図る取り組み—他団体・他競技との連携

県内大会も新人大会と総体のみで、他校との交流もなく、他競技に比べて活動が閉塞的になりがちである。そこで、ジュニアクラブの発表会や小・中学校の運動会のエキジビションに出演するなど、活動の幅を広げると共に、他のスポーツにふれ親しみ、身体を動かす楽しさと喜びを再確認することによって、豊かな人間性を育む機会の充実を図る。

昨年度は「公益社団法人瀬戸フィルハーモニー交響楽団」(以下瀬戸フィル)から依頼を受け、コラボレーション企画を行った。本校体育館のステージで瀬戸フィルが演技に使用している楽曲を生演奏するのに合わせて個人と団体の演技を行った。これは、瀬戸フィルが地元高校生とコラボレーション(演奏)するといった、坂出市の町おこし活動の一環として行われたもので、坂出市のバックアップがあり実現した。また、今年度は「2016-2017年度国際ロータリー第2670地区[四国]地区大会」の歓迎アトラクションに出演する機会を頂

表3. 習い事の内容(就学状況別)

順位	未就学児	順位	小学1・2年生	順位	小学3・4年生	順位	小学5・6年生	順位	中学生	順位	高校生
1	水泳	1	水泳	1	水泳	1	学習塾	1	学習塾	1	学習塾
2	ピアノ	2	ピアノ	2	ピアノ	2	ピアノ	2	ピアノ	2	ピアノ
3	体操	3	英会話	3	学習塾	3	水泳	3	英会話	3	英会話
4	英会話	4	習字	4	英会話	4	サッカー	4	習字	4	サッカー
5	サッカー	5	サッカー		習字	5	英会話	サッカー	水泳		
6	学習塾	6	学習塾	6	サッカー	6	習字	5	水泳	6	剣道
	バレエ	7	体操	7	そろばん	7	そろばん		7		野球
8	絵画	8	空手	8	空手	8	野球	8	バスケ	9	野球
9	習字	9	そろばん	9	体操	9	空手	9	そろばん/空手		バスケ
10	剣道	10	バレエ	10	野球	10	テニス	9	剣道/テニス	10	バドミントン/陸上

※スポーツ白書2017

いた。サンポート高松の大ホールのステージで、県知事や坂出市長をはじめ、四国4県のロータリークラブの会員約3,000人の観客を前に10分程度の集団演技を披露した。

#### 4.成果と課題

##### (1)ジュニアクラブの再建

平成23年度の受講者は7名と少なく、先行きに不安があったが、地道に活動を続けていくうちにその存在と評判が口コミで広がり、平成24年度25名、平成25年度29名、平成26年度32名、平成27年度34名と順調に増加、平成28年度は33名で活動し、入会希望の問い合わせも多く、入会待ちの状態が続いた。今年度は27名と推移している。これに伴い、指導者が不足したため、部員を指導補助に充てた。このことにより、自ら学んだ知識と技術をどのように伝達すれば上達するのかを考えなければならない状況が生まれ、自身の技術習得までのプロセスの理解を促すきっかけとなった。また、コミュニケーションの大切さを実感すると共に、一般的な教養や専門的な知識、技術、技能を正確に習得しておかなければならないことに気づく機会となった。それに加え、自らの課題の発見・解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習(アクティブ・ラーニング)の一助となり、日頃の指導内容に対する理解と技術力向上のスピードアップにつながった。

10代のスポーツクラブ・運動部加入率(図1)を学校期別で見ると、小・中学校期で7割であるのに対し、高校では5割、大学期では3割へと減少している。この数値から高校期がターニングポイントとなっており、他競技への移行時期であることがうかがえる。このことを受けて、これまでの活動を行う一般コースと平成26年8月にゴールデン・エイジの活動を計画的に推進することを目的とした選手コースを設けた。今まで以上に本格的に競技に取り組み、新体操競技大会に出場したいという受講生を主体とし、中学、高校へ活動が継続できる環境を整えた。活動は水曜日と土曜日の週に2回とし、競技を通して運動への関心や自ら運動する意欲、運動の技能や知識を習得し、競技力を高めることができる環境整備を目的として行った。2回の活動日の内、水曜日の活動時間を高校生の部活動時間帯に組み込むことにより、その練習に触れることで刺激を受け、新たな目標を見出すなど向上心が生まれた。また、高校生も練習に取り組む姿勢にプライドが芽生えるなど変化があらわれ、互いに切磋琢磨しながら活動を行うなどの効果がみられた。

現在、ジュニアクラブの1、2期生が本校に入学しており、体操部の主力選手として活躍している。受講生の中には本校体操部で競技の継続を希望している者も徐々に多くなってきており、今後、部員の増加と競技力の向上に一役買ってくれることと期待している。

このように一応の成果を見ているが、今後、適切な指導を行っていくためには、競技レベルや発達段階に応じた専門的指導が行える指導者を継続的に確保することが重要となってくる。

##### (2)演技会開催の取り組み

当初20名程度だった来場者が、実施したアンケートの要望に応じて取り組みを改善し、現在は500名を超え、保護者や関係者以外に小・中学生や高校生、地域の方々だけでなく、県外からも訪れるようになった。また、多くの方から応援メッセージと招待出演者からは次会への出演希望が寄せられている。

ジュニアクラブも選手・一般コースを含めた受講生全員が出演し、日頃の活動を披露する良い機会となっ

図1 10代のスポーツクラブ・運動部への加入状況(全体・性別・学校期別)

	加入者	未加入者
全体	57.3	42.7
男子	66.9	33.1
女子	47.4	52.6
小学校期	72	28
中学校期	74.5	25.5
高校期	51.2	48.8
大学期	34.8	65.2
勤労者	16.9	83.1

※スポーツ白書2017

ているだけでなく、目的意識を持って練習に励むなど、活動に一石を投じる取り組みとなっている。また、終了後に入会の問い合わせがあるなど、受講生増加の一助にもなっている。

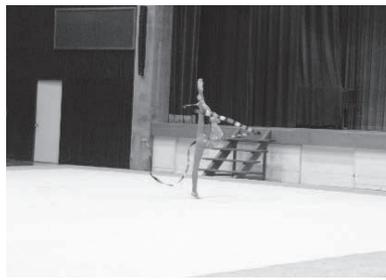
部員にとっては、全国トップレベルの選手の演技や競技に取り組む姿勢に触れ、その違いを感じ、学ぶだけでなく、直接技術指導を受けるなど、より高い知識と技能を身につける良い機会となっている。演技会では試合のように一つのミスが順位を大きく左右する訳ではないので、プレッシャーから解放され、いきいきと演技をすることができている。観覧席が近いこともあり、来場者からの拍手や驚嘆の声を肌で感じ、演じることの楽しさや喜びを再認識し、達成感と充実感を得ることができている。演技を披露し、その成功体験に対する他者から与えられる肯定的な評価によって、自己肯定感を持つことができている。また、努力や練習をすれば「できる」ようになるという達成感や、仲間や指導者から受け入れられているという受容感を持ち、運動有能感が高められ、向上心が芽生えた。このような成功体験を積み重ねることで、自尊感情が高くなり、仲間との協調性を生み、より高い水準の演技を見せたいという気持ちを持ち、自身の可能性を見出し、今まで不可能だと思っていた新たなスキルに積極的に挑戦する気持ちが芽生える。この気持ちこそが競技に対する必要な心構えであり、今後の大会の結果にもつながっていくものとする。

また、会場内に学校紹介ブースを設け、来場した方々に新体操の魅力だけでなく、本校の特色を伝える試みを実施した。その効果を検証し、内容見直しを図りながら学校全体としての取り組みに発展させていきたい。

今後、演技会を通して部員が自らの課題を見つけ、技術・技能の習得に主体的・協働的に取り組むことができる体制作りを努め、社会の動向等を注視しながら、より効果的な内容になるよう整備を進める必要があると考えている。



(演技会の様子)



(女子個人招待選手)



(女子バトントワリング)



(トランポリン体験)



(団体演技)



(個人演技)

### (3)活動の充実を図る取り組み—他団体・他競技との連携

昨年度の瀬戸フィルとのコラボレーションでは、演奏を聴きにきた来場者には新体操を観て頂き、演技を観に来た来場者には演奏を聴いてもらうといった、双方にメリットがある活動になった。また、新体操を初めて目にした方々から感動の声が多数寄せられ、他団体との連携が新体操を未開拓分野の方々に周知、拡散できるという副産物を生むことを確認することができた。

今年度の国際ロータリー地区大会の出演を記念して、ロータークラブ様よりこれまで高価で購入できなかった体操用補助器具と、練習撮影用の iPad を寄贈して頂いた。また約 3,000 人の観客の前でミスなく演技ができたことは出場した部員にとって大きな自信につながったと考えられる。また、このような異年齢、他団体との交流経験は、今まで関わりのなかった人や社会への興味や関心を高め、人間関係を築く力や集団活動を通じた社会性の育成にもつながっていくと考えられる。

新体操は、その歴史からも分かるようにいつでも、どこでも、誰でも手軽に行えるものであり、ランニングやストレッチと同様に、スポーツの基本としての特性がある。事実、他競技の強豪校でも練習内容にマット運動や倒立等が取り入れられており、新体操の基本練習として行っているアイソレーション等を含め、他競技において有用な練習となり得る点がないか検討していきたい。今後、他競技との合同部活動練習を視野に入れながら、吹奏楽部とのコラボレーションや他校・他団体との連携の幅を広げ、より多くの方々に新体操の魅力を知って頂けるような様々な方法を模索していきたい。

## 5.おわりに

私自身、中学生の頃から競技に取り組むようになり、香川県立坂出工業高校の門を叩いた。入学した年が折しも東四国国体の年であり、本校は全国高校選抜、インターハイ、国体 3 冠を達成する快進撃を遂げた。1 年生だった私は監督、先輩に尊敬と憧れの念を抱き、競技を続け大学に進学した。だが、そこで新体操の認知度の低さを思い知らされた。そして母校に赴任した後もその現状は変わることはなかった。

この現状を変えようと各地で同様の取り組みを行っている学校やクラブは少なくない。本校においても現在は部員数も 20 名となり、一応の成果をみている。また、最近では 2016 年リオデジャネイロ五輪の閉会式において、現在日本の新体操をリードしている青森大学男子新体操部がアクロバティックなパフォーマンスを披露した。このことは各報道番組で取り上げられ、新体操がより多くの方々に認知されることとなった。少しずつではあるが、地道な活動が功を奏してきているという実感を持っている。今後、さらに取り組みを進化させ、新体操の認知度の向上、競技人口の拡大に努めていきたい。

最後に、近年、部活動そのもののあり方が問われている。私は幸いにも専門競技の指導に携わることができている。しかし、その一方で専門外の競技の部活動指導を任せられ、活動に対する要求に応えられず取り組みに苦慮している教員も少なくない。また、教員の多忙化によって指導が不十分となり、そのことにより生徒、保護者から意見されることもある。その結果、部活動そのものの必要性が問われるようになってきている。その中で、新体操を通じて生徒の体と心の成長につながる指導を心掛け、部活動を学校教育の一環として位置づけ、その指導の意義や役割を踏まえ、重要性和必要性を伝えていきたい。それが専門競技を指導できる立場にある私の役割でもあると考えている。

## <参考文献等>

- (1) 平成 28 年度(公財)全国高等学校体育連盟加盟・登録状況【全日制+定通制】 2016.8 現在
- (2) 「スポーツ白書 2017」 笹川スポーツ財団 2017.3.1
- (3) 「スポーツ大百科」 日本体育協会 1982.10.1
- (4) 「日本体操協会 60 年史」 日本体操協会 1995.5.10
- (5) 「教養としての体育原理 新版」 大修館書店 2016.7.20
- (6) 「月刊バスケットボール」 月刊バスケット部編集部 2015.9.29